

# オセアニア[豪州]

## 1 農・畜産業の概況

豪州の農業(林業、水産業を除く)は、GDPで全体の約2.2%(2008/09年度)、就業人口で全体の約3.7%(林業、水産業を含む)と、産業全体に占める割合は必ずしも高くない。しかし、2008/09年度の全商業輸出額に占める農産物の割合は12.6%と鉱物資源(67.7%)に次いで高く、輸出産業の中で重要な位置を占めている。

豪州では、国土面積(約7億7千万ヘクタール)の54%に相当する約4億2千万ヘクタールが農業可能地であるが、

そのうち94%は牛や羊の放牧に利用可能な自然草地および採草地であり、穀物や野菜などが栽培される耕地面積は、約2,400万ヘクタールにすぎない。豪州の農場数は、2004/05年度まで多少の増減はあるものの、減少傾向で推移し、2008/09年度(2009年6月末現在)は、13万6千戸となっている。

表1 農場数などの推移

区分/年度	(単位:戸、千人、豪ドル)				
	2004/05	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09
農場数	129,934	154,472	150,403	140,704	135,996
農業従事者	357.5	348.0	350.3	352.0	357.6
1農場当りの農業粗所得	72,785	70,182	29,800	64,220	76,000

資料: ABARE「Australian Commodity Statistics」  
「Australian Farm Survey Results」  
注1: 各年6月末現在  
注2: 農場施設評価額22,500豪ドル以上の農場

一方、経営面では、肉牛、羊、酪農などの専業経営のみならず穀物などの兼業も多いことから、農業従事者全体の約8割が何らかの形で畜産経営に携わっているとみられている。

近年、増加傾向にあった農業粗生産額は、2002/03年度および2006/07年度の干ばつの際、大きな落ち込みをみせた。また、2007/08年度も干ばつ状況が見られたが、農業粗生産額は前年度比21.7%増と大幅に増加した。その反動から2008/09年度については、同3.7%減の約420億9千万豪ドルとなった。内訳を見ると、畜産物が同1.2%減の192億8千万豪ドル、穀物など畜産物以外の農作物が同5.7%減の228億2千万豪ドルと、畜産物および農作物ともに前年

度をやや下回る形になっている。

なお、畜産物粗生産額のうち、肉牛・牛肉(生体輸出を含む)は76億8千万豪ドル(4.5%増)、牛乳・乳製品は、干ばつの影響がみられたものの、高水準の生産者乳価を反映して大幅に増加した前年度から12.8%下回る、39億9千万豪ドルとなった。

2008/09年度の農産物総輸出額(FOB)は、前年度比16.4%増の約320億5千万豪ドルと、大幅に増加した。

このうち、畜産物輸出額は、同4.6%増の約152億豪ドルとなった。内訳は、牛肉・生体牛が約54億豪ドル(16.7%増)、羊肉・生体羊が約17億豪ドル(14.0%増)、羊毛が約

23億豪ドル(17.0%減)、牛乳・乳製品が約27億豪ドル(3.0%減)となり、牛肉・羊肉の輸出が堅調であった。しかし、2008/09年度の畜産物輸出額は、穀物などの農産物輸出

額が畜産物輸出額以上に増加したため、農産物総輸出額全体の47.3%と、過半数を下回る結果となっている。

図1 農業粗生産額(2008/09年度)

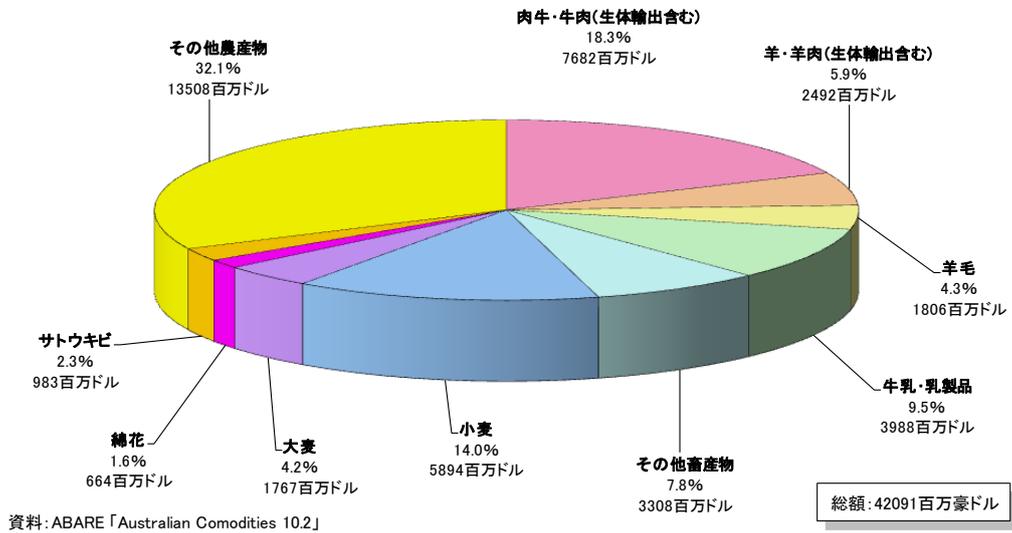
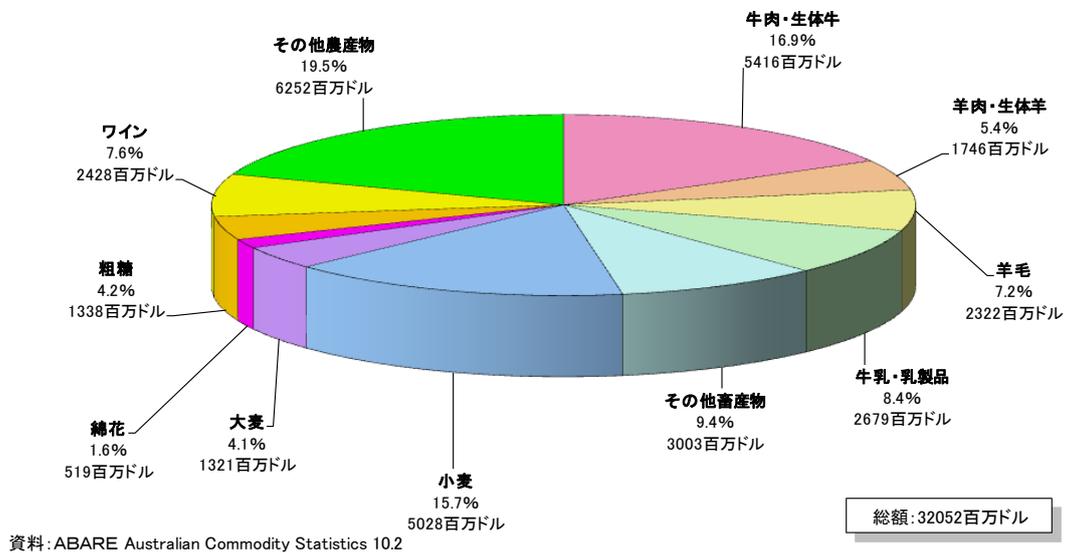


図2 農産物総輸出額(2008/09年度)



## 2 畜産の動向

### (1) 酪農・乳業

豪州の酪農は、放牧を主体とする経営が大部分であり、気象条件に恵まれ、牧草の生育に有利なビクトリア州を中

心に行われてきた。しかし、近年では、そういった地域においても、度重なる干ばつを経て、穀物や乾草などの購入飼料の利用が必須となっている。

生産される生乳の約8割が加工向けであり、さらに、製造される乳製品の約6割が輸出向けという輸出依存型産業である。

従って、生乳生産量は気象条件や牧草の生育状況などによって大きく変動するとともに、酪農経営は乳製品の国際市場および為替変動の影響を受けやすいという特徴を有している。

### ①主要な政策

豪州では、かつて、加工原料乳に対する価格補てん政策（連邦制度）と飲用向け生乳に対する最低価格保証政策（各州の制度）を実施していたが、2000年7月1日に両制度がともに撤廃となり、生乳の販売・流通は完全に自由化された。このほか、2003年7月には酪農団体の再編が行われ、豪州酪農庁(ADC)とほかの研究機関が統合し新たにデイリー・オーストラリア(DA)が発足し、販売促進や研究開発、マーケット情報提供などを一括して行っている。

なお、これらの事業財源の多くは、生乳の販売時に課される生産者課徴金(強制徴収)によるものである。

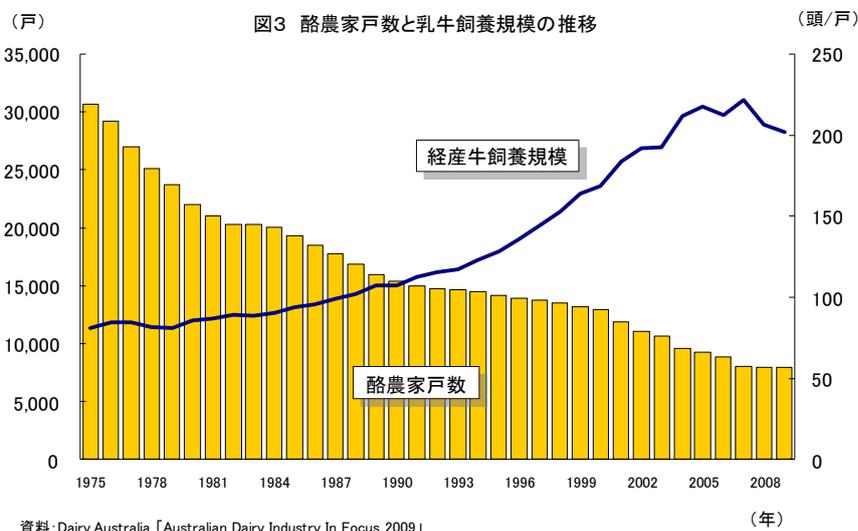
### ②生乳の生産動向

乳用経産牛の飼養頭数は、1957年の345万1千頭をピークに減少を続けてきたが、92年以降、好調な酪農市場を反映して増加に転じ、その後はおおむね増加基調で推移していた。しかし、2002/03年度の干ばつで飼養環境の悪化が進んだことから、減少に転じている。さらに、2006/07年度から2007/08年度にかけて度重なる干ばつに見舞われ、2009年6月末の乳用経産牛飼養頭数は、干ばつ発生前の2006年6月時点と比べ14.9%減の160万頭となった。また、同時点の酪農家戸数も、同10.4%減の7,924戸となった。一方、1戸当たりの経産牛飼養頭数は規模拡大が進み、近年200頭程度となっている。

表2 乳牛飼養頭数等の推移

区分/年	2004	2005	2006	2007	2008	2009
乳牛飼養頭数(千頭)	3,055	2,860	2,788	2,663	2,537	2,612
経産牛飼養頭数(千頭)	2,038	2,010	1,880	1,786	1,641	1,600
酪農家戸数(戸)	9,611	9,243	8,844	8,055	7,953	7,924
一戸当たり経産牛頭数(頭)	212	217	213	222	206	202

資料: ABARE「Australian Commodity Statistics 2009」  
Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」  
注: 乳牛飼養頭数、経産牛飼養頭数および農家戸数は6月末時点



生乳生産量は、90年代に入りガット・ウルグアイラウンド合意に伴う乳製品輸出拡大への期待を背景に、増加傾向で推移してきた。2002/03年度以降は、干ばつなどにより減少傾向にあったが、2008/09年度は、1.8%増の938万8千キロリットルと、干ばつの影響を受けた2007/08年度に比べわずかに回復した。

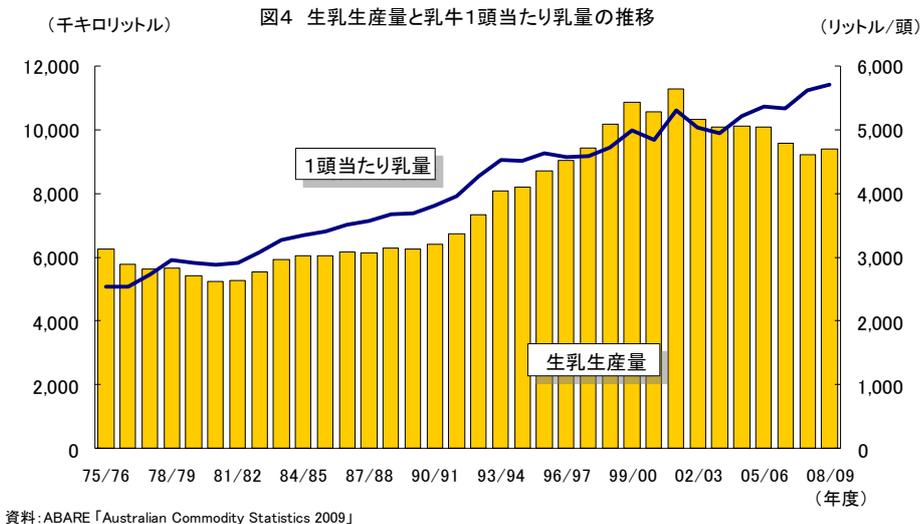
豪州では、放牧に適した乳牛へと品種改良が進められたこともあり、日本や米国などと比較して経産牛1頭当たり乳量はそれほど多くない。しかし、近年は、遺伝的改良や飼養管理技術の向上などにより着実に増加し、2008/09年度の経産牛1頭当たり乳量は、過去最高の5,707リットルとなった。

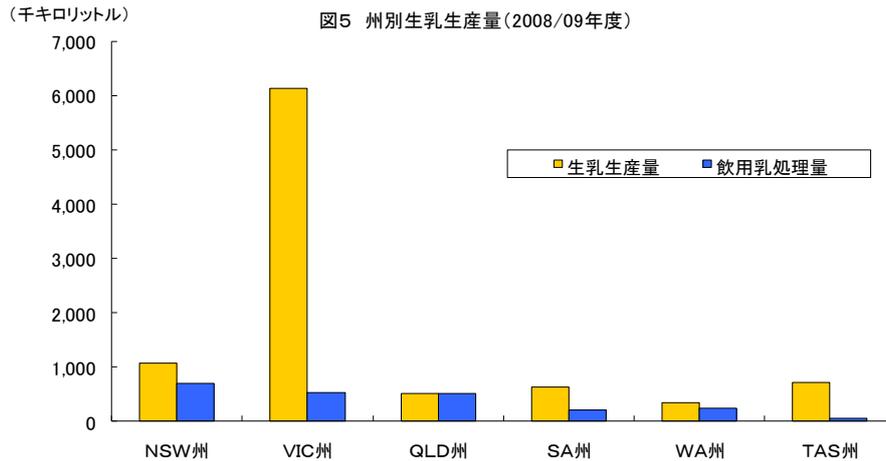
乳製品加工用に仕向けられる生乳の割合は、乳製品輸出の拡大に伴って徐々に上昇する傾向にあり、生乳生産量の80%程度を占めていた。しかし、近年は生乳減産が続い

ていることや国内の飲用乳需要が好調であることなどから、その割合は低下しており、2008/09年度の加工向けシェアは、76.1%となった。

生乳生産量を州別に見ると、ビクトリア州が全体の65%を占めて他州を大きく引き離しており、豪州最大の酪農地域であることを示している。一方、飲用乳の処理量は、シドニーなど大消費地を擁するニューサウスウェールズ州が最も多く、続いてビクトリア州、クイーンズランド州となっている。

このように、生乳生産に占める飲用向けの割合が州により大きく異なるため、乳業メーカーごとの平均生産者乳価については、飲用向け割合が高い地域とそれ以外の地域とでは、大きな差が生じている。





資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus 2009」

### ③ 牛乳・乳製品の需給動向

主要乳製品の生産量は、国際的な乳製品需要の拡大を反映して増加傾向にあったが、干ばつ(2002/03年度)の影響により減少に転じ、以降は、多少の増減はあるものの減少傾向で推移している。2008/09年度の生産量は、生乳生

産量がわずかに回復したこともあり、チーズを除き前年度を上回った。品目別に見るとバター(バターオイルを含む)が16.4%増の14万9千トン、脱脂粉乳が29.0%増の21万2千トン、全粉乳が3.9%増の14万8千トンとなった。一方、チーズは5.2%減の34万2千トン、また、チーズ生産の減少に伴い、ホエイパウダーの生産も減少した。

表3 牛乳・乳製品生産量の推移

区分/年度	(単位: 千キロリットル、千トン)					
	2003/04	2004/05	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09
生乳	10,076	10,127	10,089	9,583	9,223	9,388
飲用向け	1,981	2,024	2,061	2,156	2,202	2,244
加工向け	8,095	8,103	8,028	7,427	7,021	7,144
バター	104.1	105.1	92.9	101.7	99.2	109.8
バターオイル	44.8	41.5	52.9	31.4	28.4	38.7
チーズ	383.8	388.4	372.8	363.6	360.6	342.0
脱脂粉乳	182.1	189.1	205.5	191.5	164.3	212.0
全粉乳	186.9	189.2	158.3	135.4	142.0	147.5

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注: 脱脂粉乳にはバターミルクパウダーを含む。

2008/09年度の主要乳製品の輸出量は、生乳および乳製品の減産により減少した前年度に比べ、大きく回復した。ただし、チーズについては生産量の減少から、前年度比28.4%減の14万5千トンとなった。

2008/09年度の乳製品生産量に占める輸出量の割合は、全粉乳が107.1%と生産量を上回り、脱脂粉乳が76.4%と生産量の大半を占めている。また、バター(バターオイルを

含む)が47.6%、チーズが42.4%と、ともに輸出指向性が高いことが読み取れる。

乳製品の輸出先は、日本、東南アジアを含めたアジア地域向けの割合が高く、輸出額ベースで全体の70.5%と、圧倒的なシェアを占めた。特に粉乳類は、還元乳などの需要が多い東南アジア諸国向けの輸出割合が高く、脱脂粉乳、全粉乳ともに輸出量全体の6~8割がアジア地域向けに輸

出されている。

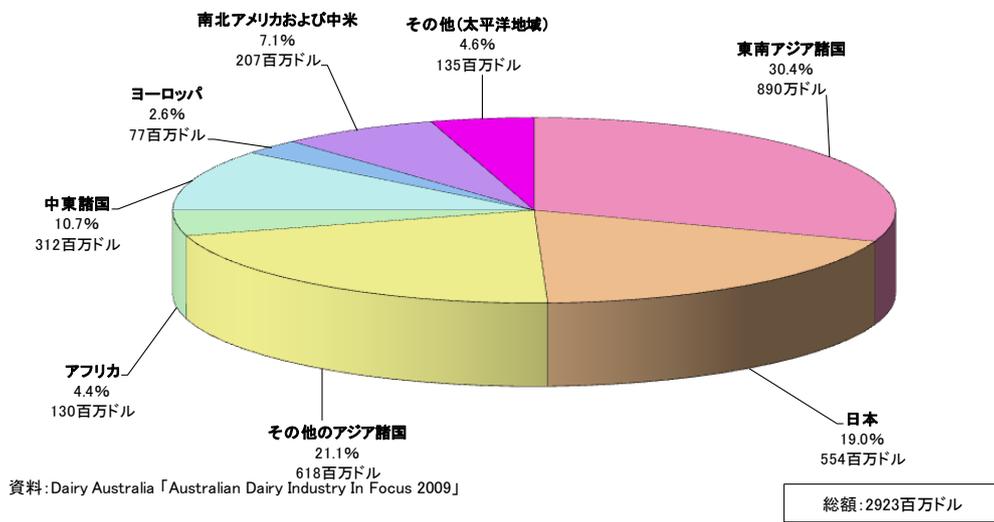
**表4 主要乳製品輸出量の推移**

(単位:千トン)

区分/年度	2004/05	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	輸出割合 (2008/09)
バター	37.9	} 35.5	44.3	34.6	44.1	} 47.6%
バターオイル	31.6		36.7	22.5	26.6	
チーズ	227.5	201.7	212.3	202.4	144.9	42.4%
脱脂粉乳	133.2	175.6	160.3	119.8	162.1	76.4%
全粉乳	160.5	164.8	143.4	125.1	158.0	107.1%
飲用乳	69.9	70.1	69.2	59.9	60.0	2.7%

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

図6 地域別乳製品輸出額(2008/09年度)



飲用乳の1人当たり消費量は、ほかの先進国と同様に牛乳、乳飲料以外のさまざまな飲料が市場に投入されたことで、90年代中ごろから減少傾向で推移してきた。しかし、カフェ文化の浸透などに伴い牛乳の間接消費が増えた結果、2003/04年度以降増加に転じ、100リットルを上回る水準ま

で回復し、2008/09年度は104リットルとなった。また、近年、売り場面積が拡大しているヨーグルトについて、1人当たり消費量は7キログラム程度となっている。また、チーズについては、ここ数年、12キログラムと一定している。

表5 1人当たり乳製品消費量の推移

(単位:kg)

区分/年度	2004/05	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09
飲用乳	100.2	100.5	103.0	103.7	103.7
チーズ	11.3	11.7	12.0	12.5	12.3
バター	4.1	3.9	3.8	4.1	4.0
ヨーグルト	6.6	7.0	7.1	6.9	6.7

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

#### ④ 乳価の動向

生産者乳価は、2000/01年度以降、1リットル当たり20豪セント台後半から30豪セント台前半で推移していた。しかし、2007/08年度は、国際的な乳製品価格の高騰を反映して、1

リットル当たり49.6豪セントと、過去最高となった。一方、2008/09年度は、世界金融危機(2008年9月)以降の経済低迷、需要減少に伴い前年度比14.5%安の42.4豪セントと大幅に低下した。

表6 生産者乳価の推移

年度	(単位:豪セント/リットル)								
	2000/01	2001/02	2002/03	2003/04	2004/05	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09
生産者乳価	29.0	33.0	27.1	27.9	31.5	33.1	33.2	49.6	42.4

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

#### (2) 肉牛・牛肉産業

豪州の肉牛生産は、酪農生産と同様、牧草(放牧)に依存した構造となっており、また、牛肉生産量の6割以上を輸出に向けた輸出依存型産業となっている。

肉牛は、乳牛に比べると粗放的な飼養管理が可能であり、また、利用可能な草地の範囲が広いことに加え、熱帯・乾燥地域などの自然条件が厳しいところでも、これに適応する品種を選択的に導入することによって飼養が可能となることから、内陸部の極端な乾燥地帯を除き、ほぼ豪州全土でさまざまな品種による生産が行われている。

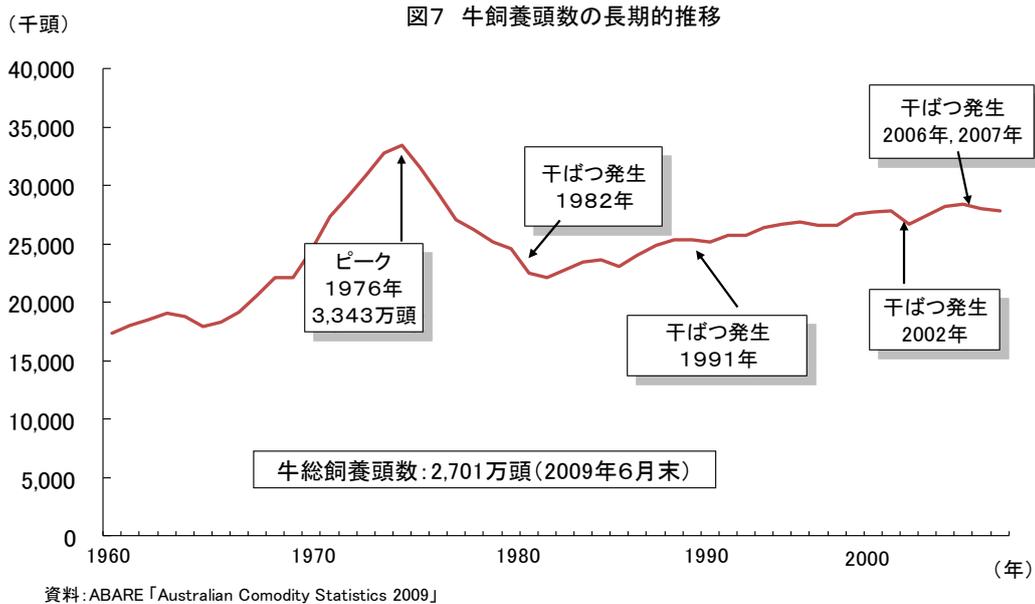
##### ① 主要な政策

肉牛や牛肉の需給を管理する制度・政策は特になく、生産者は国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。

また、豪州家畜検疫検査局(AQIS)などの政府機関が防疫政策を、豪州食肉家畜生産者事業団(MLA)などの業界団体が販売促進、研究開発、市場情報の提供などを行っているが、これらの事業財源の多くは、生体の取引(販売)時に課される生産者課徴金(強制徴収)によるものである。

##### ② 牛の飼養動向

豪州における牛飼養頭数(乳牛を含む)の推移を中・長期的に見ると、1960年代後半から70年代半ばにかけて、世界的な牛肉需要の増大を背景に急速に増加し、76年には過去最高の3,343万頭を記録した。その後、第二次オイルショック(79年)などによる世界的な牛肉需要の減退や肉牛経営の悪化、大干ばつの発生(82年)などによりと畜頭数が急増し、84年には2,216万頭とピーク時である76年の飼養頭数に比べ約3分の2まで減少したが、それ以降は緩やかな増加に転じた。



96年以降は、干ばつなどの影響による増減はみられたものの、全体として2,600～2,700万頭台でほぼ安定的な推移となった。しかし、2002/03年度の干ばつの影響で頭数は再び落ち込みをみせた。2005年、2006年と2800万頭台ま

で回復したが、2007年、2008年は、2006/07年度の大干ばつにより減少が続き、2009年は、前年を1.2%下回る、2701万頭にとどまった。

表7 牛飼養頭数の推移

区分/年	(単位:千頭)					
	2004	2005	2006	2007	2008	2009
肉用牛	24,410	25,323	25,605	25,373	24,784	24,458
乳用牛	3,055	2,860	2,788	2,663	2,537	2,548
合計	27,465	28,183	28,393	28,037	27,321	27,006

資料：ABARE「Australian Comodity Statistics」  
注：各年6月末現在

肉用牛の飼養頭数を州別に見ると、クイーンズランド州(シェア47.5%)、ニューサウスウェールズ州(同21.8%)、ビクトリア州(同9.2%)の東部3州で全体の8割近くを占めている。また、近年はインドネシア向け生体牛輸出の拡大を背景に、クイーンズランド州北部や北部準州(同7.2%)の伸びが著しい。

### ③ 牛肉の需給動向

100年に一度といわれる干ばつに見舞われた2006/07年度の牛と畜頭数(子牛を含む)は、908万頭と900万頭を超

える頭数となったが、2007/08年度以降は減少に転じ、2008/09年度の牛と畜頭数は、前年度比1.1%減の870万頭となった。枝肉生産量についても、と畜頭数の減少により、前年度比0.3%減の214万トンとわずかに減少した。

牛肉の輸出量は、近年86～98万トンの間で推移しているが、2008/09年度は、日本および韓国において、景気低迷による需要後退や他国産牛肉との競合激化がみられたものの、米国における加工用牛肉輸出の回復や、その他の国・地域向け輸出が増加したため、総輸出量は前年度比4.1%増の97万トン(船積み重量ベース)となった。

表8 牛肉需給の推移

区分/年度	2004/05	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09
と畜頭数(千頭)	8,854	8,401	9,081	8,799	8,703
生産量(千トン:枝肉重量)	2,162	2,077	2,226	2,155	2,148
輸出量(千トン:船積重量)	948	892	974	930	968
1人当たり消費量(kg)	35.9	35.8	36.3	35.6	32.5

資料: MLA「Statistical Review」

2008/09年度の国別輸出量(船積み重量ベース)は、最大の輸出先である日本向けが、前年度比0.5%減の36万トン(シェア37.5%)、米国向けが、同17.5%増の28万トン(シ

ェア29.2%)、韓国向けは、同22.6%減の11万トン(シェア11.7%)となった。

表9 牛肉の国別輸出量の推移(船積み重量ベース)

国名/年度	(単位:千トン)					輸出シェア (08/09)
	2004/05	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	
米国	366	296	303	240	282	29.2%
日本	419	388	403	365	363	37.5%
韓国	91	121	157	146	113	11.7%
その他	72	87	111	179	210	21.7%
合計	948	892	974	930	968	

資料: MLA「Statistical Review」

生体牛の輸出については、90年代中頃からインドネシア、フィリピンなど東南アジア諸国向けの肥育素牛を中心に急増した。生体牛の輸出は、97年のアジア経済危機の影響により一時的に減少したものの、その後の順調な経済復興や中東諸国など新規市場の開拓もあって、再び増加基調に転

じ、2002/03年度には、100万頭を超え史上最高となった。その後、輸出総頭数は、減少傾向で推移していたが、2008/09年度は、3年連続して最大の輸出先となったインドネシア向けが同国の経済成長などにより増加したことから、前年度比15.7%増の89万頭となった。

表10 生体牛の国別輸出頭数の推移

国名/年度	(単位:千頭)					輸出シェア (08/09)
	2004/05	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	
インドネシア	358.6	358.3	452.2	547.2	701.4	78.7%
フィリピン	36.0	17.0	14.0	15.6	10.7	1.2%
マレーシア	38.2	44.9	52.2	26.9	23.4	2.6%
日本	22.7	24.1	21.5	20.2	17.5	2.0%
ブルネイ	14.2	7.9	5.9	6.0	3.7	0.4%
エジプト	7.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0%
サウジアラビア	0.0	24.4	26.2	14.8	24.9	2.8%
中国	62.1	14.3	12.0	6.8	16.0	1.8%
その他	84.8	86.8	91.8	132.5	93.4	10.5%
合計	623.6	577.7	675.8	769.9	891.1	

資料: MLA「Statistical Review」

1人当たりの食肉消費量は110キログラム前後で推移しているが、ここ2、3年は減少傾向にある。2008/09年度では

牛肉が、32.5キログラムと、羊肉同様伸び悩む一方、鶏肉は、健康志向や低価格を反映して消費を伸ばした。この結

果、食肉の中では鶏肉(38.0 キログラム)の消費量が最も多く、次いで牛肉、豚肉(21.9 キログラム)、羊肉(13.1 キログラム)の順となっている。

表11 1人当たり食肉消費量の推移

区分/年度	(単位:kg)				
	2004/05	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09
牛肉	35.9	35.8	36.3	35.6	32.5
マトン	3.0	2.8	3.2	2.7	2.1
ラム	10.3	10.2	11.2	11.4	11.0
豚肉	22.1	22.8	25.4	24.7	21.9
鶏肉	37.7	38.5	39.1	37.8	38.0
合計	109.0	110.1	115.2	112.2	105.5

資料: MLA 「Statistical Review」

注: 牛肉には子牛肉を含む。

#### ④ 肉牛価格の動向

2005年の肉牛価格は、干ばつ(2002/03年度)の影響が緩和してきたことから肉牛生産者の出荷抑制傾向が見られた中で、豪州産牛肉に対する需要が引き続き旺盛であった

ことから、2001年9月以来の最高水準に達した。しかし、2006年は、大干ばつの影響で早期出荷が進み下落した。2007年には、輸出需要の減退からさらに値を下げたが、2008年は、その反動もあり、経産牛については大きく回復した。

表12 肉牛価格の推移(枝肉換算)

区分/年	(単位:豪セント/kg)				
	2004	2005	2006	2007	2008
若齢牛(枝肉重量200kg以下)	344	368	341	324	333
肥育牛(同300kg~350kg)	324	329	324	312	319
経産牛(同200kg~260kg)	281	285	268	254	268

資料: ABARE 「Australian Commodity Statistics」